

I 研究 経 過

本校は、昭和53年4月に開校し、本年度で5年目を迎える精神薄弱養護学校である。本校は、開校以来“表現化に視点をあてた教育課程の編成・実践”について、過去4ヶ年研究を進め、その都度、研究紀要や公開発表会をもって、本校の考え方なり研究の方向を示して来ているが、ここで、一応その経過をふり返ってみると、

1 昭和53年度の研究

研究紀要第一集から抜粋すると、次のようになっている。研究の方向を「積極的に社会に参加しうる人間の育成」-小・中・高等部一貫した教育内容の精選と構造化についての共通理解-と定め、その教育内容選定の視点を、自立化、社会化、表現化、職業化におくことにし、各分野の目標、分野間のかかわりと、中心的分野を表現化として行うことを決め、教育内容表を作製、さらに、社会的自立の考え方、高等部のあり方、表現化の目標等の問題につき研究を進め、最終的なテーマを次のように決定-「表現化に視点をあてた教育課程の編成」-学習内容の検討・教育内容表の完成・年間指導計画の作成

2 昭和54年度の研究

53年度に作成した教育内容表及び年間指導計画の実践過程の中から、サブタイトルを次のように変えた。-社会的自立を旨とする学習指導の研究-とし、「社会的自立」をめざすための各学部の中心分野と各学部の教育目標を次のように決定した。

小学部-自立化を中心にして、表現化とのかかわり、ねらいは、「身辺自立や健康安全に対する能力の育成」

中学部-社会化を中心にして、表現化とのかかわり、ねらいは、「社会生活に必要な行動様式を身につける」

高等部-職業化を中心にして、表現化とのかかわり、ねらいは、「職業人としての知識や職業への適応」

3 昭和55年度の研究

54年度の実践の深化と、学習指導法の改善、さらに評価についての研究を進め、各学部の特色を一層明確にしようとした。

4 昭和56年度の研究

過去3ヶ年間の総まとめの年として、指導内容の検討に重点をおき、特に重度、重複化に対する内容の検討を行い教育内容表の改訂をし、「生きてはたらく」力となるための内容をどうもりこんで行くかに研究の視点をあてた。従って、その指導方法も、個人生活の基礎づくりから集団

生活への適応、さらに社会的職業的生活への発展としての学習内容の一貫性の問題が、研究の中心となった。

このように、経過をふり返ってみると、そのねらいとしているものは「社会的自立」であり、その能力の育成のために、「表現化」に中心をおき、その内容をどう一時間の指導内容にもりあげるかが最大の問題であった。しかも、「表現化」の内容は、唯単に言語的や表記的なものにとどまらず、「意志伝達」をするためのあらゆる「表現」を指していることは、紀要第3集の中で、前大石校長が述べているところである。しかしながら、紀要第3集には、将来の展望として、次のようにも述べている。即ち、「……するに、精神薄弱児にとって意志伝達のための表現力にも欠ける面があるので、このような力を特別な教育方針や、指導内容でもって教育していく必要がある……」と、過去4年間にわたっての研究活動の反省から問題点としてあげている。

5 昭和57年度の取り組みについて

前年度までの主題による取り組みはひとまず終了したので、昭和57年度には新しい研究主題を設定して、これに取り組むことになった。その際、前年度までの研究の成果を継承することと、一方では新しい観点に立脚するという、ふたつの点を同時に満足させることが必要であった。こうして得られたのが「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」という主題である。最終的にこれに落ちつくまでには、校内で討論の積み重ねがあったことはいままでのないが、討論の過程で出された考え方の主なものをここに挙げておく。

① 体力・気力の育成 — 本校高等部の生徒が、卒業後直ちに社会的・職業的場面に参加することになるのを考慮して、先ず必要とされるこれらの資質を育成しておかねばならないとする発想であった。この考え方は、「表現化」の継承になるものでもあり、今回の「たくましく行動する子」という表現に生かされることとなった。②「養護・訓練」の充実 — 多くの精神薄弱養護学校と同様、本校にも、これへの取り組みが弱いとする反省が基礎にあったためである。「養護・訓練」は新しい主題の実践の中に吸収されることとなったが、その具体的な方法は今後の検討に俟たねばならない。③感受性を育てる — この考え方は、ひとつには認知能力の訓練が精神薄弱児教育のカギであるとする点と、今ひとつ、「行動・表現」されるべき心的内容の充実が必要とする点との、ふたつの観点から出て来たもので今回の「豊かな心」という表現で生かされている。

1学期から2学期の初めにかけて、討論の中で出されたこれらの考え方を包摂して採択されたのが今回の主題である。そして、この主題の具体的内容として、「主題への取り組み」の中で挙げられているような若干の補足が加えられた。2学期にはこの主題を実践し、検討するための研究授業を繰り返し行ったが、その成果は、3学期の研究発表と、紀要第4集でお示したところである。

新しい主題による研究はこうして1年を過ごしたのであるが、まだ緒についたばかりというところであり、実質的にはこの研究発表会以後に2年目に入ることになる。